

【資料紹介】山本五十六国葬 遺族控室 日誌

当館は、山本五十六の遺品を収集した有志団体である「長岡の歴史を創造した人々・その思想と歴史を伝える会」から資料の寄託を受けています。その中から山本五十六の国葬時の遺族控室の記録について紹介します。

1943 年 4 月 18 日、前線を視察中の連合艦隊司令長官山本五十六の搭乗機がブーゲンビル島で撃墜され山本は戦死しました。山本の遺骨が安置された東京麻布の水交社には遺族控室が設けられ、長男で喪主の義正ら遺族のほか山本の海軍士官学校の同期で親友の堀悌吉が詰め、遺族の相談に乗ったり、海軍省と遺族の調整にあたったりしていたようです。

国葬とは、葬儀を国が取り仕切るということを意味します。海軍省を中心に、米内光正を葬儀委員長とする葬儀委員会が設立され実務にあたりました。国葬は神式で行われなくてはならず、墓地は多摩霊園の名誉霊域でなくてはなりませんでした。戦争の継続を図る日本政府にとって、山本の死を戦意高揚に利用するため、盛大な国葬がいとなまれました。そのため遺族の数少ない希望のうち叶えられたのは、山本本人の遺志であり遺族の希望でもあった長岡への分骨でした。

遺族控室の記録によると、5 月 24 日、海軍省からの照会に対し、堀を通じて海軍省に分骨を希望する旨を伝えています。翌 25 日海軍の長屋人事局課長から分骨を認める旨の返答があり、あわせて神式での国葬の後、長岡での仏式の弔いは問題ないとのことになりました。27 日、遺族控室に遺骨を移動させて通夜が行われた後、義正、礼子未亡人、長女澄子、次女正子、次男忠夫の遺族と、海軍からの立ち会いの 3 人の将校、そして堀、という少人数でひっそりと分骨が行われました。遺族と海軍省（政府）との間の山本五十六の死をめぐるギリギリの折衝の様子を窺い知ることができます。

(田邊 幹)

春恒例の研修をおこないました

4月は様々な人との別れと出会いの季節ですが、文化財の脅威となる虫たちが博物館に侵入してくる季節でもあります。そうした時期に合わせて当館では、毎年、新たに加わる方だけでなく、館で活動する全ての関係者に参加してもらう研修を開催しています。その名も「IPM 研修」です。IPM とは、Integrated Pest Management（総合的有害生物管理）の略称です。文化財の保存施設である博物館では、虫やカビなどの文化財を汚損する生物を物理的、生物的、化学的な防除方法を組み合わせて防ぐ、資料の保存管理の事を指します。かつて殺虫殺菌に広く使われていた臭化メチルの使用全廃（2005 年より）を期に取り入れられるようになりました。薬剤だけに頼らず虫の侵入やカビの発生を日常的な管理によって未然に防ぐことを目指しています。今年3月には、多くの施設で用いられてきた酸化エチレンを含む殺虫殺菌燻蒸剤の製造が終了しました。資料の殺菌が可能な化学的防除法の選択肢が大きく制限されるため、今後はますます IPM による資料管理の徹底が求められるようになるのは間違いありません。

このように、博物館の資料保存をめぐる状況は大きな変化を迎えています。薬剤による定期的な殺虫殺菌に大きく頼ることなく、日常的に目をかけ、手をかけながら資料を守っていくことでしか今後の持続的な資料保存は達成できません。そのためには、館の資料保存担当だけでなく、関係者全員の目が、手が、心がけが必要となります。このような意識を新たに持ってもらったり、再度共有したりし、意識を定着するためにも4月の研修はとても重要です。特に、暖くなる4月以降は多くの文化財害虫が館内に侵入してきます。まずは、関係者全員が当事者意識を持って館内に侵入した「^虫ムシを^{無視}むし」せず対処できるように、今年の IPM 研修でも意識の共有を進めていきたいと考えています。

（橋詰 潤）



写真 IPM 研修のようす

～編集後記～

戦後 80 年の節目となる今年は、様々な場面で戦争や平和をテーマとした話題が取り上げられる一年になるのかと思います。当館では夏季テーマ展「戦後 80 年 私の戦争体験記－銃後の日々－」を予定しています。夏の展示に先駆けて、4 月に戦死した新潟県ゆかりの海軍軍人、山本五十六の国葬に関する資料を紹介しました。

当館の「IPM 研修」は、新潟県地域史研究ネットワーク事務局から加入団体へむけて、年度末頃に開催のお知らせをしています。毎年、研修に参加している団体もあり、資料保存の方法として IPM の意識向上に繋がっていると思います。

「れきはく通信」に対するご意見、ご要望、また IPM 研修に関する問い合わせは、新潟県地域史研究ネットワークニュース事務局までご連絡ください。

事務局メール net@nbz.or.jp